

「研修会等名称」

大学コンソーシアム京都第10回FDフォーラム
第3分科会「FD活動の組織的取り組み」

場所：同志社大学、キャンパスプラザ京都

期間：2005年3月5日、6日

1. 研修の内容

以下、報告者が聴講した第3分科会「FD活動の組織的取り組み」での発表・討論内容について報告する。

大学での教育において、個人（教員・事務・学生）、組織（大学）、センター（FD拠点）の3者がそれぞれの立場からFD活動に対してどのように取り組んでいくかをテーマとする旨、まずコメンテータから概要の説明があって、その後午前中に3名の報告者による各30分の報告、午後に参加者との質疑応答が行われた。

まず、和歌山大学経済学部の吉田雅章氏より「和歌山大学における7年間のFDの取り組み」について、FD活動の後発組（報告者）である和歌山大学が先行する他組織の活動を参照しながら、授業改善に取り組んできた経過が報告された。概要は以下の通りである。平成10年にFD研究会を組織し、翌年度FD推進委員会に改組、「公開授業の意義」を定義し、その後、年に数回の公開授業と検討会を開催することで、学生による授業評価とあわせて授業改善に務めてきた。現時点で組織として表面上のFDは成立したが、今後は、限られた予算を活用して、個人のFD活動をより一層組織化していくことが課題だということである。

つぎに、名古屋大学高等教育研究センターの近田雅博氏より「FDの目指す方向をどう設定するか」について発表があった。今日のFD活動には明確な目標設定がなく、各大学なりのあるべき姿を描く必要性が強調された。アメリカ、中国など海外の大学および名古屋大学における教育・学習ガイドラインの事例が紹介され、共通する要素として学生中心主義、フィードバックの重要性が挙げられた。今後求められる方策として、目指すべき教育・学習のあり方を明確化し、授業実践を公開化し、学生の学習ニーズを調査するなど、教員・学生をふくめ大学全体で目標や手法・実践の場を共有して、よりよい方法論を開発することが提案された。

最後に、静岡大学・大学教育センターの三浦真琴氏より「FD活動の新しい地平を目指して」というテーマで発表があった。まず現状については、FD活動を「義務」と捉え、企画の「実施」が目的化し、個人の評価と結び付ける、活動の濫用が指摘された。FD活動と組織の生成については、静岡大学の取り組みを例に、上意下達の命令研修からの脱却、学生学習相談室の設置や他教育機関（とくに小学校）との連携によって、苦情や相談、他機関の手法を改善に活かすことを強調された。また、大学教員養成プログラムとして、大学院の段階で「教える」トレーニングプログラムが必要であり、教員の新規採用も、模擬授業や試用期間などを活用した教育実践力の調査、レセプションや会合の場を通しての人間関係構築力の調査によって、教育活動に相応しい人材を確実に見極めるシステムが必要であり、将来的にはドイツのような教授資格制度の必要性も説かれた。

2 . 研修の成果

愛知大学でも、他機関との連携については、現在教職課程で関わっている栄小学校との間で何らかの連携がとれるであろう。大学院生に対しては、オープンカレッジ、エクステンションセンターの各講座、学部の外国語授業の非常勤講師として積極的に採用し、大学院の授業科目にも、個々の大学院生の専門研究テーマに沿った教育実践科目を設置して、大学院学生を研究者として養成すると同時に、教育者としても養成できるような制度を整えるべきではなかろうか。

3 . 授業への研修成果の反映状況

この研修を通して報告者自身の授業に反映できるような成果はとくに見いだせなかった。報告者が聴講した3つの発表が云わんとするところは、至極当たり前のことで誰もが漠然とは感じていることである。結局のところは以下の2つの点に集約できるのではないか。まずは、何を教えるのか、しっかりしたカリキュラムを作り、契約書ともいえるシラバスを明確にし、契約どおりに授業が行われたかどうかについて厳密で公平な評価を受けるということ。そしてもう一点は、(これは受け入れ難い教員からの反発もあるだろうが)教員が相互に授業を見学し、率直な意見を交換して授業改善につなげる。フォーラムや講演会に参加することも間接的にほんの少しは役立つのかもしれないが(報告者自身にとっては時間の無駄であった)、どうも時間とお金の無駄遣いのような気がする。もっと我々自身の身の回りの細かなことから出来ることは沢山あるのではないだろうか。

学 部 長	F D 委員 長	F D 委員 会	総 合 企 画 課 長	係